九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「理性」について ： パスカルの思考を手がかりとして

上田, 富美子
九州大学医療技術短期大学部

https://doi.org/10.15017/134

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 10, pp.21-33, 1983-02-28. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

「理性」について
―パスカルの思考を手がかりとして―

上　田　富美子*

La raison selon Pascal

Fumiko Ueda

パスカルの思想に諸々の角度から接近する中で，おのずから浮き出てきた重要な問題がある。それは，「理性」（raison）の問題である。「理性」について語ることは，おそらく「人間」（homme）について語ることと別のことではない。だから当然のことに，「理性」の問題は人類の歴史とともに古いと言って過言ではあるまい。それは実際，多くの神話や物語が証明するところでもある。そして哲学もまた無論のこと，この問題について論及し続け倦むことを知らなかった。だからといって、これらが古い神話や物語ほどにもこの問題を闡明することができたかといえば，それは甚だ疑問であろう。語れば語るほど遠ざかるということもあり，また一部が明るみにもたらされれば，他が暗さの中に残されるということもなかったとは言えない。「理性」を語るのは，たしかに容易なことではない。それは「人間」を語るのが容易でないのと同様である。そこには論及の対象が同時に手段でもあるという困難が絶えず付随している。私たちは実際，「理性」について論じるとき，「理性」を用いないですますわけにはゆかないだろう。だからといって，「理性」への問いの回避が許されることにはならない。なぜなら自己自身を問うことは，「理性」を委ねられた人間の逃れることのできない宿命であるのだから。まさにデルポイのアポロン神殿に掲げられた「汝自身を知れ」の扁額の言葉そのままに。

* 九州大学医療技術短期大学部

1

「理性」（raison）について考察するための重要な手がかりは，パスカルの小論「幾何学的精神について」《De l'esprit géométrique》の中に見出せるように思える。というのは「幾何学的精神」（esprit géométrique）は言うまでもなく，「パンセ」《Pensées》にいわゆる「幾何学の精神」（esprit de géométrie）に即応し，「幾何学の精神」はそこで「理性」（raison）とも呼ばれているからである。（断章1，2，3[1]参照）パスカルはこの小論において以下のように言う。「探求（recherche）をいよいよ押し進めることによって，最早定義する（définir）ことができない始元的な語（mot primitif）と，その証明（preuve）に役立てるのにそれ以上明白なもの（claire）は見出しえないほどの原理（principe）とに必然的に（nécessairement）到達する（arriver）。したがって人間は，どんな学問（science）でも，それを絶対に完結した秩序（ordre absolument accompli）によって処理することは，自然的にも恒久的にも不可能であるように思われる。／しかし，そこからあらゆる種類の秩序を放棄すべきであるという結論は出てこない。なぜなら，ここに一つの，それは幾何学（géométrie）の秩序であるが，説得力の足りない点では実際劣っているが，確実性の足りない点では劣っていない秩序がある。それは一切のものを定義することも，一切のものを証明する（prouver）こともしない。その点において，それは完結した

ものに劣っている。だが，それは自然的光（lumière naturelle）に照らして明白で不変な（constant）ことがらしか仮設し（supposer）ない。であるから，それは完全に真実（parfaitement véritable）であり，自然（nature）が論述（discours）に代って，それを支えるのである。人間の世界で最も完全な（le plus parfait entre les hommes）この秩序は，すべてを定義し，すべてを論証する（démontrer）ところにも，また何も定義せず，何も論証しないところにも存在せず，すべての人に理解されている明白なことを定義せず，その他一切を定義し，またすべての人に知られている一切のことを証明せず，その他一切を証明するという，この中間（milieu）にとどまっている。この秩序に対して，すべてを定義し，すべてを証明しようとする人も，また自明（évident）でないことがらにおいてそれをするのを怠る人も，等しく誤っているのである。／これこそ幾何学が完全に教えてくれることである。幾何学は，空間（espace），時間（temps），運動（mouvement），数（nombre），同等（égalité）というようなことがらのいずれをも，また多く存在する同様なものをも，定義しない。そのゆえは，それらの用語（terme）は言語（langue）のわかる人々に，それらが意味している（signifier）ことがらをきわめて自然に（naturellement）示すので，それらを解明しようとすれば，教示するよりもむしろ曖昧にすることになるからである」[2]（斜線は原文における替行を示す）

ここには「幾何学的精神」すなわち「理性」についての，的確にして要を得たみごとな叙述が見られる。そこから私たちが汲み取りうるのは，可能な限りの一切を「定義し」（définir）一切を「証明する」（démontrer）という「理性」の徹底した態度であろう。「理性」は行使すべきところには，自らを完全に行使し，その網を怠りなく張りめぐらす。取りこぼしは許さない。だが一方，「理性」の範囲にはおのずから限界があり，それは上に「原理」（principe）として示されたものに相当する。それは「自然的光」（lumière naturelle）に照らして明白であり，「自然（nature）が論述（discours）に代ってそれを支える」ので，「理性」はそれをただ承認するほかはない。私たちはここで，「理性」の可能な範囲での無類の強さと，そうでない部分での非力とを同時に突きつけられる。それがすなわち，「確実性の足りない点では劣っていない」が，「説得力の足りない点では劣っている」と言われる所以であろう。これはまず念頭に置かれる必要がある。だがいずれにせよ，これらの叙述が示すところは，「理性」についての上記のような二つの契機の指摘であるに違いない。しかしながら，これら両者は対等の資格をもつことができないと言えはしないだろうか。というのは，「原理」は一つの限界の表示であり，本来の「理性」の働きは，「定義し」，「論証する」ところにこそ求められなければならないであろうからである。実際，「パンセ」においてパスカルはそのような態度を取っているのであり，「理性」はそこではもっぱら「推理」（raisonnement）の能力と見なされ（断章1，3，282など参照），ここにいわゆる「原理」については，「理性」との明確な関係の指摘は見出せない。だが「理性」について論ずるに際し，これら「原理」の問題が看過されてよいものとは到底思えない。だからこそ小論「幾何学的精神について」では，重要な契機として取りあげられているのであろう。そこで以下，この点について考察をはかることにしたい。

ところで上にいわゆる「原理」は，同じこの小論の別の箇所で「対象」（objet）と言い換えられている点は，とりわけ着目に値しよう。すなわち，「幾何学がその主要な対象（objet）としていることがらを一つとして定義しえないということは，おそらく奇異に見えるに違いない。なぜなら，それは運動（mouvement）をも数（nombre）をも空間（espace）をも定義しえないからである」[3] つまり，同じく定義・論証不可能なものとして，ときには「原理」と呼ばれていたものが，ここではあらためて「対

象」と名付けられているのであるから，「原理」と「対象」とは別の事態を指してはいない。ところで「原理」が「対象」と言い換えられることによってはじめて明確になるのは，それらが「理性」による論証の前提であり，素材にほかならないということであろう。それなくして「理性」は，自身の力を発揮することはできない。「対象」という呼び名は，「原理」という名のもとではやや不明であった両者の関係をはじめて明るみの中に引き出す。だが「原理」という言葉にしても，もとの意味は「始元」に相当するのであるから，[4] いずれにせよこれらの「前提」という意味は動かないところであろう。「前提」を受けてこそ，「理性」は「理性」として始動する。それにしてもこれら「原理」の例として「空間」，「時間」，「運動」，「数」などが挙げられ，これらがとくに「用語」(terme)ないし「始元的な語」(mot primitif)と規定されている点は注目されよう。これらは同時に「理性」の「対象」であるにしても，具体的なものとは見なし難いのであるから。そこでつぎに当然，この点についての解明が要求されることになろう。

上の引用の中ではまず「原理」についての言及がなされているが，それらはつぎのようなものである。「探求(recherche)をいよいよ押し進めることによって，最早定義する(définir)ことができない始元的な語(mot primitif)と，その証明(preuve)に役立てるのにそれ以上明白なもの(claire)は見出しえないほどの原理(principe)とに，必然的に(nécessairement)到達する(arriver)」これらの言葉は明らかに，「原理」に「到達する」ためのある過程を示唆している。その過程があればこそ，そこへの到達は必然性をもつのであり，それ以上明白なものはありえないほどの確実性を委ねられることにもなる。してみると，ここにいわゆる「原理」は，最早無前提の「始元」ではないことになろう。では先立つものは，一たい何なのか。その点については明白である。すなわち，上に「探求」(recherche)と呼ばれているものがそれであり，しかも「探求」は「定義」と「証明」とを指している。つまり「定義」と「証明」による「探求」の行き着く先が，「原理」と考えられていると言うことができよう。「定義」と「証明」の力は言うまでもなく「理性」に帰属する。してみると，ここでは「原理」は「理性」の到達点にほかならないことになろう。そして「原理」の明白さや必然性は，むしろ「理性」自身によって保証されたもののようにさえ受け取ることが可能である。これはさきに見てきたこととまさに逆の事態ではないのか。こうした見解は，同じ小論の別の箇所にも見出せる。すなわち，「この学(幾何学)は第一の既知の真理(vérité)に到達する(arriver)と，そこで立ちどまり(s'arrêter)，それらの真理を証明する(prouver)さらに明白なものがないところから，人々がそれらを真理として認める(accorder)ことを要求する」[5]

しかしながら，この「理性」の到達点は，「原理」と呼ばれることによって今度は「理性」の「対象」となり，新たな出発点を形成することにもなる。してみると，ここに見出せるのは一連の事態であり，矛盾は生じないと言えるのではないだろうか。つまり，「理性」の到達点はただちに「原理」として出発点に転じるにしても，そこには論理的先後関係が明確に保持されているのであるから。そしてそのことは実際，推理・論証をこととする「理性」自身の本性と言っても差し支えあるまい。なぜなら論理的展開は，「帰結」をまた新たな「前提」としてはじめてその機能を遂行しうるものだからである。「論証」能力である「理性」は，「帰結」をただちに「前提」に転化することがなければ，論理の鎖をつないでゆくことができない。そしてもしそれが不可能であるとすれば，それは最早「理性」の名に値しないことになろう。してみると，これは「理性」にとって極めて本質的な問題であり，「理性」を狭く解して推理・論証の機能だけに限定するにしても，除外されてよいような簡単な問題ではありえない。それは「理性」の中に深く喰い入り，その機能を内から支えている。したがって，二つの契機をとも

に「理性」に帰属するものとした「幾何学的精神について」の考え方は，この意味で極めて至当なものと言わなければならないだろう。

だが，「理性」が上記のように一つの「帰結」を受けて推論を展開し，そこにもたらされた新たな「帰結」からさらにまた推論をつないでゆくという具合に，どこまでも論理の連鎖をたどるものであるにしても，その最初の第一の「前提」は，明確な意識的論証の結果であることは不可能ではないのかという疑問が生じるやもしれない。そのことは実際，さきの引用において，「定義」・「論証」の機能と「原理」との間に明確な区別を設けたパスカルの態度自身に十分汲み取りうるところでもある。そこでは「原理」はたしかに「自然的光」（lumière naturelle）による明証的な「真実」とされていた。だがたとえそれがこのように特別の呼び名を与えられようと，与えられまいと，何らかの論理的過程を前提することは前に見た通りであり，だからこそまた論理的展開の導入部たりうるのだと言えよう。だとすると最初の「前提」ないし「対象」は，そこに立てられ置かれた時から，すでに分節化の可能性を内包するものと見なすことができる。それを明確化し確認してゆく過程こそが，「理性」による推理の歩みと言って差し支えないだろう。だとすれば，「理性」はただ「自然的光」によって与えられたものを追認するだけであり，そのすべての論理的階梯は，多くの過程を経，長い迂回のすえに再びもとの「前提」へと帰ってゆくために必要な，一つの手続と受け取れないこともない。言い換えれば，「理性」の働きは「自然的光」の追体験であり，無意識の意識化の道程であると見ることもできよう。

さてこのように見てくると，さきの引用はこうした考え方を十分裏付けてくれるように思える。すなわちそこでは，「自然的光」の過程と「理性」のそれとがパラレルなかたちで対置され，ちょうど同じ道程の往還構造を示しているように見えるからである。そして私たちはここに「理性」に特徴的な，一つの循環的な在り方に出会うことになろう。「理性」とはトートロジィを本性とするものではないだろうか。論理の第一原則たる同一律，A＝A，A≠非Aはやはり「理性」の究極の在り方を示したものと言えはすまいか。それは引用全篇にみなぎる自信に溢れた口調からも，十分推察できる。[6)]

さて以上の考察を踏まえれば，「理性」の「原理」ないし「対象」が，「空間」，「時間」，「運動」，「数」などと設定されたことの理由もおのずから明らかとなろう。それらは具体的なものでありえようはずはない。パスカルは至当にも，「パンセ」の中でそれらを「思弁的構想的事物」（chose spéculative et d'imagination）と名付けている。この耳慣れない言葉はもっとありふれた言い方で示せば，「観念」（idée）という語に相当しよう。すなわちこれらの「原理」はすべて「観念」であり，だからこそそれらはまた「始元的な語」ないし「用語」とも呼ばれて，「言語」（langue）への帰属を明示されているのである。さきの引用自体の中で，「それらの用語（空間，時間，運動，数など）は，言語（langue）のわかる人々に，それらが意味していることがらをきわめて自然に示すので……」と明確に述べられているように。

2

以上，小論「幾何学的精神について」を中心に「理性」の基本的性格の考察をはかったのであるが，「理性」がそこに発し，そこへと帰ってゆく「原理」がとりわけここで大きく浮上してくることになる。というのは私たちはそこにおいて，推理・論証の能力という「理性」の見掛け上の規定の背後に横たわるこのものこそが，実はその成否の鍵を握ることになるらしいという見極めを得たからである。それらは「空間」，「時間」，「運動」，「数」などによって示された。そこで当然私たちにかけられるつぎの課題は，この点について考察をすすめ，「理性」に関する認識を一そう深めてゆくことであるに違いない。ところで，「パンセ」の中にも，「空間」，「時間」などに言及した箇所がいくつかあり，そこには何らかの問題解明の手がかりが

用意されているように見える。そこで以下「パンセ」を中心に，この課題への接近をはかりたい。

「パンセ」における「空間」，「時間」などについての言及は，まず断章１２１の中に見出せる。「自然（nature）は絶えず同じもの（même chose）を繰り返す（recommencer）。年（an），日（jour），時間（heure）もそうだが，端（bout）と端とがつながりがあって続いている。一種の無限（infini），永遠（éternel）のようなものが，そんなふうにして出来ている。何も無限なもの永遠なものがあるのではない。かずかずの有限なもの（être terminé）があって，それらが無限に増加してゆく(multiplier)のである。したがってただそれら有限なものを増加せしめてゆく数（nombre）のみが無限である。私にはそう思われる」（１２１）ここでは，「空間」，「時間」，「数」などが「自然」（nature）に帰せられている点がとくに注目されよう。「自然」は無論，私たちの外部にある外界を代表するものである。そうするとここで当然問題になるのは，１に見た「理性」の「原理」としてのこれらのものと，言い換えれば「観念」としてのこれらのものと外界との関係であろう。その手がかりは，以下の見解の中に得られるように思う。すなわち，「幾何学の精神（esprit de géométrie）においては，原理（principe）は明白（palpable）であるが，通常の使用から遠ざかっている（éloigné de l'usage commun）。したがって，人はその方へ顔を向けようとも思わない。習慣（habitude）がないからだ。しかし少しでもその方へ顔を向けるならば原理は十分に見える(voir)。人の眼を脱れることのほとんど不可能なほどに大きい（gros）この原理の上で誤った推理（mal raisonner）をしようとするならば，全く不正確な精神（esprit faux）をもつよりほかはあるまい」（１）ここで「幾何学の精神」すなわち「理性」について，その「原理」（principe）を「見る」（voir）と言われていることは重要であろう。しかし，「大きくて」（gros）「明白な」（palpable）この「原理」は，いついかなる場合でも人の眼に「見える」わけではない。それは通常の使用を離れている。それを「見る」ためには何らかの意図的操作が必要になる。ただそれさえなされえたならば，それらは容易に誰にでも「見え」，誰にでも捉えられる。このことは「理性」の「原理」の日常的次元からのある種の隔絶と，その「普遍性」（universalité），「意志」（volonté）との何らかのかかわり，そして私たちの「見る」機能との密接な関係を示唆しているように思える。

さてそこで，以上のような見解と，さきに見た断章１２１の「原理」と「自然」との関係についての言及とを併せ考えると，どのような事態がもたらされることになるのであろうか。私たちが「自然」を外界を「見る」ということは，単に漠然たることではなく，明白に捉えること，すなわちわかるということでなければならない。そのことは，これらをすでに私たちすべてに共通な普遍的観念として，換言すれば言語化可能なものとして見ていることを意味する。そしてそれがすなわち，「空間」，「時間」などの「原理」と見なされたものにほかならないと言えよう。してみると私たちはこの場合，無前提なありのままの外界を見ているのではなく，すでに何らかのかたちで「理性」を先立させ，「理性」が与えた「空間」，「時間」[7]などの枠組を外界の中に読み取っていることになろう。「理性」は自ら「自然」の中に投げ入れたものを，再び取りあげ自己のものとする。この循環する性格が「理性」に基本的なものであることは，すでに１に見た通りである。またこのように見てくると，断章１２１で「自然は同じもの（même chose）を繰り返す」と言われたことの意味もあらためて理解されることになろう。本来「自然」は多様であり，そこに厳密な意味での同一事態の繰り返しを見出すことは困難であると言える。したがって，「同じもの」の「繰り返し」はむしろ「理性」の側に由来し，同じ「理性」の特質が「自然」の中でそのようなかたちをとって，私たちの眼に映ずると見る方が容認しやすいことのように思えるからである。

以上を通じて明らかになったことは，「理性」はまずもって「見る」という機能と密接に結びつき，とりわけて外界を指向するということであろう。だからこそ1に見たように，「理性」の諸「原理」として挙げられたものが「空間」,「時間」,「運動」,「数」など，すべて外界構成の基本的要因をなすものであったと言うことができよう。ところで「理性」が，自ら仕掛けたこのような仕組を通してしか外界を意味あるものとして捉ええないのだとすれば，そこには予め，「理性」による何らかの取捨選択が行われているはずであり，こうした外界への対応の仕方は当然に間接的であると言える。これが多分さきに見た「理性」の日常性からの隔絶と，ある意図的なものへのかかわりということの意味であろう。たしかに私たちは，常に外界をこのようなものとして読み取っているわけではない。そのように捉えるには捉えるだけの相当の理由があるに違いないし，そこにはすでに一つの態度の前提を予測することができる。そして「理性」が万人共通の普遍的なものであるとすれば，これらもまた普遍的であり，個人差を容れないものであるだろう。

さて，そうした事態すべてを含めて以下のパスカルの言葉は興味深い。「習慣（coutume）は我々の本性（nature）である。‥‥したがって，我々の魂（âme）は，数（nombre）や空間（espace）や運動（mouvement）を見る（voir）ことに慣れる（accoutumer）なら，そういうものを信じ，そういうもののみを信ずるということを誰が疑おうか」(89) ここでは明確に「魂」(âme)が「空間」などを「見る」(voir)と言われているのであり，これらが単に肉眼を通じて捉えられるのでなく，「魂」の眼を，言い換えるなら「理性」の眼を透過することによって与えられるものであることが示唆されている。しかもとくに「習慣」（coutume）という語が用いられることによって，これらが自然的なものでなく人間的なもので，何らかの人間的意図を踏まえてのものであることが暗示されてもいる。したがって，この見解は，上に見た私たちの考察を十分支持してくれるものであろう。ただし，さきの断章1では逆に，「理性」が「原理」を「見る」ということに関して「習慣」（habitude）がないと言われている点は留意されねばならないところであろう。これは一見，矛盾した言説のようにも見える。しかし，断章1にいわゆる「習慣がない」は「通常の使用から遠い」（éloigné de l'usage commun)を受けてのことであり，ここにいわゆる「習慣」（habitude）は自然的，日常的事態に即応するのに対し，上記の場合の「習慣」（coutume）は，そうした日常的次元を離れたところで，意図的に構築されてゆく事柄を指すのであるから矛盾は生じない。《habitude》と《coutume》という二つの言葉の微妙な使い分けが，とくに注目されるところであろう。

3

以上を通じて私たちに与えられた「理性」の特性は，一言で言えば極めて閉鎖的なものであろう。1において，それは「理性」が循環として一貫して自己同一性を堅持する点に示され，2においては，「理性」は外界把握にかかわりながらも，自ら外界に投げ入れた枠組を再び自己のうちに取り込むという仕方で，1の基本的性格を裏付けるという点でそのことは明らかにされた。こうした「理性」の徹底した自己貫徹の姿勢は，「理性」の何よりの強みであろう。「理性」はそれが何であれ，一たん己れのうちに取り込みえたならば，推論の網の目を隈なく張りめぐらし，そのすべての過程を通じて完全に自己同化する。こうして「自然」は「外界」は，「空間」，「時間」，「運動」，「数」などと見られることによって，容赦なく人間の手のうちに取り込まれることになる。「自然」の人間化は，おそらく「理性」なくしてはありえないことに違いない。「理性」が人間であることの証拠とされる所以であろう。私たちは「自然」を打診し，そこから無尽蔵の自己確認を引き出す。ここには何のためらいもなく，無限の誇りがあるばかりである。それは推理・論証の終りのない展開に見合うものであろう。そこにあるのはしたがって，ただ無限の「進歩」（progrès）

の概念だけである。「自然科学」(sciences naturelles) はまさに，こうした「理性」の在り方の自覚に立つものと言うことができよう。[8]

物理学者としても当代の先端に立ちえたパスカルにあって，だからこそ「理性」に対する大いなる肯定と無上の信頼が見られたことは，けだし当然のことと言わなければなるまい。パスカルは言う。「私は手もなく足もなく頭もない人間 (homme) を考えることができる。なぜなら頭は足より必要であるということを我々に教えてくれるものは，経験 (expérience) にすぎない。しかし私は思考 (pensée) をもたない人間を考えることはできない。それは石か獣であろう」(339) また「思考に人間の偉大さ (grandeur) がある」(346) さらに「私は私の尊厳 (dignité) を空間 (espace) によってではなく，私の思惟の規則 (reglement de ma pensée) によって求むべきである。私は領土のかずかずを所有したとしても，ただそれだけのことであろう。空間によって宇宙 (univers) は私を一点であるかのように包み呑む。思惟 (pensée) によって私は宇宙を包容する」(348) ここには「理性」に代って広く「思考」(pensée) という言葉が用いられているものの，それこそが「人間」(homme) であることの誇らかな証拠として，何ものにもまして先立されているのがわかるであろう。「思考」は「理性」は先行し，すべてを決定する。あらゆるものの成否は，ただこの一点に委ねられている。それはすでに私たちが十分見てきたところでもあった。

「理性」が閉じた系であり，その中で無限の論理的展開を行うものであるとすれば，それが際限のない自己陶酔と自画自讃を招来するのも当然の成行であると言えよう。[9] 閉じた系の中で無限を志向し，またそこでは万能であるこのものは，たしかに「神」(Dieu) にも似ている。閉じた系の枠内という限界はあるにもせよ，そこには何一つ「理性」の眼を逃れるものはなく，またほしいままのその支配を免れうるものもない。パスカルはこうした考え方を抱いた代表的思想家として，「エピクテトス」(Épictète) とその一派を挙げている。「諸君の眼を神 (Dieu) の方へあげよ，とある人々は人間に言う。諸君と似ている (ressmbler) 者，そうして諸君から崇められようとして諸君を拵えた者を見よ。諸君は自己を神に似たものとすることができる。諸君が神に従いたいと思うなら，知恵 (sagesse) は諸君を神に等しいものにしてくれる (égaler) であろう。『顔をあげよ，自由なる人々 (hommes libres) よ』とエピクテトスは言うのである」(431) また「汝らは汝らの本性 (nature) から見て神に似たるもの (semblable)，神にかなえるもの (conforme) である，そう彼らは汝らをして思わしめたのである」(430)

だがここにまで立ち至ったとき，それを「思いあがり」(orgueil) として反転せしめる力もまた，たしかに人間の中にはある。その上に人間は安閑として居坐っているわけにはゆかない。極限まで上昇したとたんに，人は転落へと追い込まれる。すなわち，「我々は固い地盤 (assiette ferme) と最後の変らざる礎 (dernière base constante) とを見つけ，そこに無限に向ってのびゆく塔 (tour) を立てようという希望にもえる。ところが我々の土台 (fondement) はすべてゆらぎ (craquer)，地面 (terre) は裂けて (s'ouvrir) 深淵 (abîme) を開く」(72) のである。この力は一たい何なのか。そしてそれはどこからくるのか。それは多分よそからやってくるのではあるまい。「理性」自身が内包しているものに違いない。だからこそ，上昇がただちに下落へとつながることになるのでもあろう。ここに当然「理性」自体の再検討が必要となってくる。そこでもう一度1に見た「理性」の特質を振り返ってみると，そこにすでにこの問題究明への鍵が隠されていることに改めて気付かされる。それは冒頭に掲げた引用の後半の部分に見られる，「中間」(milieu) ということにかかわるのに相違ない。

そこでは「中間」は「明白」と「不明」との「中間」として設定され，「理性」のもつ限界そのものに深くかかわる。すなわち「定義」・

「論証」が可能な範囲では「理性」は明白そのものであるが，問題は「原理」と呼ばれた前提にあると言えよう。それはすでに見たように，「理性」の機能の出発点でもあり行きどまりでもあった。そこに「自然的光」の届く間は，「理性」はそれを「対象」として自己の埒内に取り込むことができる。しかしながら，「自然的光」の外は不明の闇であろう。この闇に対して「理性」は無力である。だが「理性」の前提には，不可抗的にこの不明さがつきまとう。これが「理性」が自らを「中間」と認めざるをえないことの根拠であり，ここで「理性」の万能は崩れ去る。それはしょせん，「理性」の域内でのことにすぎなかったと言える。自らを「神」にもなぞらええた「理性」の「思いあがり」は，この堅固な壁の前に無残にもはじき返される。しかし「理性」はそこに眼を向けさえしなければ，自己の王国に君臨することが可能であり，無上の誇りを堅持することもできる。だからこそ冒頭の引用には，その限界にもかかわらず，一貫して毅然たる調子が保たれているのでもあろう。だがおそらく，これらのことは同じ事態の表と裏であり，自己の外での弱さこそが，内での無類の強さに転じさせる要因となったと考えることができはしないか。「理性」にはその本性上，こうしたアンビヴァレントなかたちがつきまとうように思える。これらのことは必然的に人間を「中間者」(milieu) として規定した，パスカルのあの有名な見解（断章71）を思い起させずにはおかない。「人間」（homme）への深い見通しは，否応なく私たちをこの一点へと導くことになるのでもあろうか。

ところで，「理性」にとってその前提の不明な部分とは何なのか。それは言うまでもなく「空間」，「時間」などのいわゆる「原理」の枠によってすくい取れなかった「自然」ないし外界の部分であり，いわばありのままの「自然」，ありのままの外界であろう。[10] これをもし真の世界と呼ぶことが可能なら，「理性」は真の世界と無縁であり，そこからはじき出されているということになろう。つまり「理性」は，世界からその根を断たれたところに成立している。だが一方「理性」はすでに見たように，まずもって外界を指向し，外へと眼を開くものでもある。これは一たいどういうことなのか。それは多分，世界との間接的関係にかかわるのではあるまいか。上記の理性の両面性もそこにこそ由来することが予想される。そこで当然つぎの課題としてはこれらの点について考察をはかり，「理性」の根本性格への一そうの接近を試みることが挙げられよう。

4

外の世界へのまるごとの関係をもちえない「理性」は，内部的には無上の強みを発揮するにしても，その反面の在り方として外部的には決定的弱さを免れえないものであることはさきに見た通りである。脆弱な基盤の上に立つ，というよりはむしろ基盤をもたない「理性」の側面があらわにされるとき，そこには正視に耐えない無残な「理性」の悲劇が出現する。定位をもちえず，迷いとさすらいの中に打ち置かれる「理性」の姿は，つぎのパスカル自身の言葉にみごとに写し出されている。「我々はたえず定めなく浮びつつ（flottant），空漠たる中間（milieu vaste）に漂う。いずれかの端（terme）に自分をつないでおけばつこうとすると，そこはゆらいで（branler）離れてゆき，追えば手をのがれてすべり去り（glisser）どこまでも逃げる（fuir）」（72）　また，「笑うべき（plaisant）理性！一ふきの風であやつられる，しかもどんな方向（sens）にでも」（82）こうした事態は深く「理性」の在り方に根ざし，避けることができない。してみると人間に「理性」が与えられていることは，かえって救い難い「悲惨」（misère）ではないのか。だがさきに述べたように，この弱さこそが無類の強さにも反転する。ここにパスカルが，人間を「悲惨」と「偉大」（grandeur）との結合と見る根拠がある。それは言い換えれば，人間が「理性」をもっていることの証である。これら両面の切り離しようのない密接な関係は，つぎの言葉に余すところなく描き出される。すなわち，

「悲惨（misère）は偉大（grandeur）から結論せられ（se coclure），偉大はまた悲惨から結論せられるから，ある人々は悲惨を偉大の証拠（preuve）として用いれば用いるほどそれだけ一そう悲惨をつよく結論することができたし，またある人々は偉大をほかでもない悲惨から由来するものとして論ずれば論ずるほどそれだけ一そう偉大をつよく結論することができた，そこでこの人々が偉大を証明しようとして述べたあらゆることは，かの人々には，ただもう悲惨を結論するための論理として役立つことになるばかりであった」（416）

さてそこで眼を「理性」の「偉大さ」の方へ転ずると，どのような事態が新たに見えてくるのであろうか。これまでのところ，その比類ない強さ「偉大さ」は「理性」の内部にのみ限られた。それが一つの閉じた領域として自足したかたちをもったとき，「理性」は隈なく自身を貫徹し，十全の力を発揮した。だが「理性」のほかは何も見出せないこの世界とは，一たいどんな世界なのか。さきに真の世界と呼んだ，具体的で多様なありのままの世界と異なり，「同じものを繰り返す」（121）「理性」一色の世界であろう。しかもこの世界を構成するのに必要な素材は，「理性」自身が他に負うことなく完全に自身の力で産出したものではない。「理性」の前提たる「対象」は，具体的な世界を抜きにしては得られないものである。してみれば「理性」がその内部でいかに強みを発揮するにせよ，「理性」の真の「自律」（autonomie）は幻想にすぎないことになる。自ら「対象」を産出することが不可能な限り，「理性」にできることはしょせん独りよがりの独断の夢を貪ることだけであろう。しかもその夢の内容はと言えば，A＝A，A≠非Aの域を出ず，積極的には何も言いえたことになっていない。しかしこれこそ「理性」の無類の強さの実態であるとも言えよう。だとすれば，「理性」の強さ「偉大さ」はあくまで括弧つきであり，本質的なものとは到底見なし難いことになる。それはただ閉鎖的な領域内でのみ通用する力にすぎない。

では「理性」の自律がこのように本来不可能なものだとすると，「理性」が閉鎖的独善を超えて真の力と強さをもつということもまたありえないことになるのだろうか。「理性」自身によっては，それはたしかに不可能であろう。だがここに唯一の方途がある。それはすなわち，「理性」が他のより強力なものに依存する方法である。ではそのものは一たい何なのか。パスカルはさし当りそれを，「意志」（volonté）において見出す。「意志（volonté）はもろもろの面のうち或る一つの面を一そう好む（se plaire），そうして自分の好まない面の諸性質を精神（esprit）に見せまいとして精神をそれからそむかせる（détourner）。したがって精神は，意志と全く足をそろえて歩き，意志の好む面を見るために足をとめる。そんなふうにして精神は，そこに見るところのものに基づいて，その事物を判断する（juger）」（99）ところでここにいわゆる「精神」（esprit）は「理性」に相当することは，断章4に照らして明らかである。というのはそこでは「精神」という言葉が，「幾何学の精神」すなわち「理性」に代るものとして用いられているのであるから。（断章4参照）また断章283の「精神（esprit）もそれ自らの秩序（ordre）をもっていい，それは原理（principe）と証明（démonstration）とによるものである」という見解もそのことを裏付ける有力な証拠となる。なぜならすでに見たように，「原理」と「証明」とはまさに「理性」の基本的特質にほかならないからである。だとすると，上記の引用はまさしく，「理性」の「意志」への従属を明言したものと見ることができよう。そのことはすでに，1の冒頭に掲げた「幾何学的精神について」の抜粋からもうかがえるところである。というのは全篇にみなぎる毅然たる調子は，何か意志的なものを予想させずにはおかないからであり，「理性」に就くという表明自体が，すでに「意志」による一つの選択を前提しているからである。それは引用に汲み取れるように，決然として他を捨て，「理性」にのみ拠るという決意表明にほかならない。まさに「理性は意志と歩調をそろえて歩む」（99）のである。

では「理性」の究極の強さを「意志」に帰属させることで，すべては事足りるのであろうか。パスカルは，そこに最終的なものを設定してはいない。だとすると，その先に見えてくるのは一たい何なのであろうか。パスカルは言う。「邪欲（concupiscence）と力（force）とが我々のあらゆる行為（action）の源泉（source）である。邪欲は意志による（volontaire）行為を，力は意志によらぬ（involontaire）行為をおこなう」（334）すなわちここで，「意志」を左右するものとして「邪欲」（con－cupiscence）の名が挙げられる。「邪欲」は広く「欲望」（désir）に包摂され，深く「情念」（passion）へとつながっている。いずれにせよ，これらは外へと向い，外のものに強く突き動かされることを共通の特質とする。すなわち，「我々の本能（instinct）は幸福（bonheur）を我々の外（hors de nous）に求めなければならないと感じさせる。我々の情念（passion）は，これをかきたてる（exciter）事物が現われ出ないときでさえ，我々を外へ押しやる（pousser au dehors）。外なる事物は外なる事物で我々をいざない（tenter），我々の気づいていないときでさえ，我々を招いている（appeler）」（464）

つまり「理性」は結局，最終的には「欲望」に従属し，その力の源泉を「欲望」に負っているということになろう。したがって「理性」に帰せられたあの無類の力と「偉大さ」とは，もともと「理性」のものではなく，その基底にある「欲望」の強大な起爆力にこそ求められなければなるまい。「理性」の閉じた系の中に反映するこの力の残像が，「理性」自身のものと取り違えられたと言ってよいかもしれない。「理性」の「偉大」は仮想にすぎず，実態は別のところに存在する。この外の力に与ることで，「理性」はかろうじて有力たりうる。してみれば，自身の閉ざされた領域内でのみ強いということは，実際には何ら積極的意味をもたないことになろう。「偉大さ」，強さを保証するものが自身よりほかにないということは，単なる自讃であり，真の保証たりえないことは言うまでもない。ここにおいて「理性」の「偉大」の神話は崩れる。最終的な力が「理性」に委ねられていない以上，「理性」が無上のものとは言い難いからである。

さてそれでは，このような「理性」の在り方は，一たいどんな意味をもつのであろうか。つぎのようなパスカルの言葉は，この点の解明に一つの手掛りを与えてくれるであろう。「我々の魂（âme）は身体（corps）のうちに投げ込ま（jeter）れて，そこに数（nombre）と時（temps）と次元（dimension）とを見出す」（233）ここで今までとりわけ「理性」に，「精神」に，「魂」に帰属するものと考えられてきたいわゆる「理性」の「原理」としての「数」や「時」や「次元」（空間）などが，実は「身体」と密接に関係することが指摘されているのは極めて注目に値する。これらのものの身体的媒介こそが，ここでは特筆されているように見える。このことは私たちに，「理性」の背後にひそむ外界との関係を改めて思い起させずにはおかない。実際「理性」の「原理」が，そもそも「空間」，「時間」，「運動」などとして設定されたこととといい，その機能が「見る」（voir）という言葉で表わされたこととといい，「理性」の外向きの在り方はすでに十分暗示されてきた。ところで「身体性」は，外界との対応に欠くことのできない要因である。上記の見解は，そのことへの注意をうながしたものと見ることができよう。してみると「理性」が，とりわけ「外へ」（hors 又は au dehors）と志向し外界と密接な関係をもつ，「欲望」や「情念」に深くかかわるも当然であり，究極においてこれらのものの支配を免れないということも容易に了解されよう。なお「欲望」は言うまでもなく，利己的な「自我」（*moi*）に根ざしている。してみると「理性」もまた，閉鎖的な自己讃美や自己陶酔とはかかわりなく，「エゴ」へとつながれるものであることは否定し難い。しょせん「理性」の役目は究極的には，「エゴ」への奉仕以外にありえないのである。[11)]

もっともすでに見たように，一方で「理性」はその「原理」を手がかりに，「自然」を外界

を内在化し，その論理的操作を通じてきたんなきまでに自家薬籠中のものとし，その対象を何重にも外界から遠ざけ，閉じた系の中に封じ込める。これがすでに示唆した外界の人間化ということであろう。人間はじかに外界にかかわることなく，「理性」によるこうした人間化の過程を通して，間接的なかかわりをもつ。「理性」は人間の外界接触のための不可欠の手だてであると同時に，人間を外界から隔てる皮膜の役割をも果す。ここにこそ人間の強さも弱さも由来する。いや正確には人間の場合，強さがすなわち弱さであり，弱さがまたただちに強さでもあるという在り方が特徴的であるが，その根拠はまさにこの一点にかけられていると言ってよいであろう。そしてこのような「理性」の特質は，人間が「道具」（instrument）を使う存在であることへの密接不可分な関係を示唆するように思える。[12]「理性」はこの意味でやはり，人間が人間であることの基本的一点にかかわり，人間の第一条件を形成することは間違いないであろう。だが「道具」が人間の生存やそのための欲望充足に役立てられるように，外界から一たん根を断たれた「理性」は，外界に働きかけそれを我がものとする「道具」ないし手段として，欲望充足へ手を貸すことになるだろう。そしてこうした「理性」の役割はまた，結局，人間の根底にひそむ「エゴ」へと向けられていることは言うまでもない。

だが一方，「理性」に本来的な間接性はじかに「エゴ」に向き合わせられることがないだけに，そこから眼を背け，その隠蔽と糊塗とに向う可能性をもつ。「人間の邪欲（concupiscence）のうちにさえ見られる人間の偉大（grandeur）。人間は邪欲から一つの驚嘆すべき規則（règlement admirable）を引き出すことができたし，また一幅の慈愛（charité）の絵画を拵えることもできた」（402）また，「人間は邪欲から，政治（police）や道徳（morale）や正義（justice）のすばらしい規則を引き出してこれをうち樹てた」（453）ここには「邪欲」への「理性」の加担の眼を覆うような醜怪さが，余すところなく描き出されている。人間特有の「欲望」の，また「エゴ」の，粉飾ときりのない増幅。これは同じ一つのことの表裏であり，「理性」の介入によってこそもたらされたものである。根底にある「欲望」を「エゴ」を押し隠し，「理性」によって表の顔を取りつくろうことで，人間はどこまでもこれらの止め金をはずしてゆくことができる。一たいどこまで？「理性」に特有の，論理的展開の無限の連鎖に見合うところまで。「理性」の「欲望」ないし「エゴ」への加担は，ただちにこうした事態の招来に至ることを，私たちはよくよく銘記すべきであろう。こうした人間にのみ可能な在り方は醜怪の極みとも言えるが，人間に本来的であり，人間が「理性」をもつ限り逃れることはできない。まさに，「人間の醜い根（vilain fond）は，じっさいはただ蔽われた（couvert）のにすぎない。むしり取られた（oté）のではない」（453）のであるから。[13]

しかしながら他方においてパスカルは，「理性の最後の歩み（dernière démarche）は，理性を越えた（surpasser）事物が限りなくあるということを認める（reconnaître）ことである。もしそれを認めるに至らないなら理性は弱い（faible）ものにすぎない」（267）と言い，また「理性にとって，理性の否認（désaveu）ということほど，ふさわしいものはない」（272）とも言って，「理性」自身に自らを超える力があるかのような暗示を与えている。たしかに「理性」特有の推理による論理的展開は，その可能を十分予想せしめるものではある。だがすでに述べたように，自足的な閉じた系を形成する「理性」には，本来その力は委ねられていないと見るのが妥当であろう。「理性」の境域を真に超え出るものは，最早「理性」とは呼ばれえないであろうから。したがって積極的な意味で「理性」を否定し超える力は，別の所に求められねばならないことになる。そしてこのものの特性は，多分「理性」のそれから逆類推することが可能であろう。つまり「理性」の限界が，「自然」や外界を「空間」などの「原理」を通じてしかすくい取れないところにあった以上，このものは「理性」が取りこぼしたありのままの

具体的な「自然」ないし外界に，まるごとかかわるものでなければなるまい。だがそのような力が，一たい人間の中に見出せるのであろうか。私たちの中に，たしかにそれは存在する。すなわち，「繊細の精神」（esprit de finesse）ないし「直感」（sentiment）[14]，または「心情」（coeur）と呼ばれるものがそれである。さきに見たように，自律的でなく他の手段としてその力を発揮する「理性」の中間的特性からすれば，それが「欲望」にではなく，「直感」ないし「心情」に依拠する可能性も保有され，もしそれが実現されるなら「理性」はこれらのものから真の力を得，己れを超え出ることも不可能ではないことになろう。そしてパスカルが実際，そのような事態を予想していたことは以下の言葉に明らかである。すなわち「これら心情（coeur）と本能（instinct）の上にこそ，理性（raison）はその基礎をおく（s'appuyer）べきである」（282）してみると，「理性」による自身の超克と否認を暗示するかに見える前に挙げた引用は，むしろ「理性」の限界の確認と強調にとどまり，それを超える積極的意味はかえって上記のような事態にこそ負っていると見るのが妥当であろう。しかしながら既述のように「理性」の出自は逆に，「欲望」に近いところにあり，その限界を免れないのであってみれば，このことは不可能とまでは言えないにしても，大きな困難を伴うものであることは言うまでもない。このことが真に行われるためには，人間を根底からくつがえす「回心」（conversion）が必要とされることになろう。もっとも，私たちの目下の関心は「理性」にあり，この点についての詳しい検討は後の機会にゆずるほかはない。

以上，パスカルの考え方を手がかりに「理性」についての考察を行ってきたのであるが，ここでその簡単な要約を与えておきたい。そこにおいて究極的に明らかになったのは，とりわけて「理性」の中間的，媒介的性格であろう。それは内と外との境界に位置し，外界を人間化し，人間の論理にこなれやすいものにすると同時に，真の世界を人間の眼から蔽い隠す。ここに「理性」のもつ強さ，弱さ，および「偉大」，「悲惨」の源泉がある。だが「理性」の根は結局「欲望」へとつながれ，外界をわがものとする「エゴ」にまで届いている。そのことはとりもなおさず，「理性」が「欲望」や「エゴ」の粉飾に手を貸すことになり，人間特有の無限の倒錯や眼をおおう醜怪の極みが出現する。だが人間には一方に「理性」に対置される能力がまぎれもなくあり，もし人がこれに依拠し，そのためにこそ「理性」を活用し，その機能を十全に発揮することができるならば，そこには人間についての違った展望が用意されるに違いない。だがそのことの実現は「理性」の本性からして，まことに困難であると言わなければならない。

私たちは今日，多かれ少なかれ「理性」の神話が崩れつつあるのを実感している。また「理性」の所産である科学技術が万能でないことに，ようやく気付きはじめてもいる。私たちは奇妙なことだが，人間に特有の「理性」を付与されているがゆえに，人間から，自己自身から遠ざかろうとしているのではないだろうか。「疎外」（Entfernung）という言葉は，まことに人間にこそふさわしい。かって人間を無上の高みにまで運ぶかに見えた「理性」に，今や私たちは倦み疲れ，だが最早その自動的展開の力をとどめよう術もなく，その呪縛の前に身動きもできないでいるかに見える。すべては「理性」の過信に発していると言えるだろう。パスカルは「理性」の本質がしょせん果てのない「エゴ」の増大に手を貸すものであることを，根底のところで見抜いていた。だが地上に世界にじかに根をおろすことのできない，この「理性」の砂上楼閣は脆くも崩れゆくほかはない。まさに「我々は固い地盤と最後の変らざる礎とを見つけ，そこに無限に向ってのびてゆく塔を立てようという希望にもえる。ところが我々の土台はすべてゆらぎ，地面は裂けて深淵を開く」（72）のである。

私たちは今こそ真剣に「理性」について問い直す時期にさしかかっていると言えはしないだろうか。その展開は私たちを追いつめ，おのずからその地点にまで到らしめた。それは最早可

想的問題としてではなく，現実的問題として私たちにかけられている。パスカルの「理性」についての所説は，その比類のない思索の徹底によって，こうした状況の中にいる私たちに多くのものをもたらしてくれるに違いない。それにしても人類の祖先が「知恵の木の実」を食べることで「原罪」をもつに至る，あの「創世記」の物語は何と人間の本質を鋭く突いていることか，パスカルの所説と併せ，古人の知の深さに今さらながら震撼を禁じえない。

〔註〕

1）番号は，ブランシュヴィク版の断章番号を示す。

2）De l'esprit géométrique, éd. Pléiade, pp. 578–579.

3）ibid., p. 583.

4）この語の原型たるラテン語の principium は，「はじまり」を意味する。

5）De l'esprit géométrique, éd. Pléiade, p. 582.

6）短大紀要第5号「パスカルの『賭け』について」参照。

7）ここで「空間」はよいとして，「時間」がどうして外界にかかわるのかという疑問が当然生じるであろう。「時間」は内的なものと見なされるからである。しかしながら，カントも気付いていたように，「空間」自体の成立に「時間」は不可欠の要因である。なぜなら私たちは，空間的広がりにおいて，一挙にすべてを見通すことは不可能であり，何らかの継起性は空間把握に必然的に付随せざるをえないからである。こうした時間的要因が加わってこそ，「運動」や「数」の成立が可能となることは言をまたない。（vgl. I. Kant, K. d. r. V.; Von dem Raume, ss. 49–50, Original–Ausgabe; Von dem Schematismus der reinen Verstandesbegriffe）

8）短大紀要　第8号「パスカルの自然および人間観」参照

9）短大紀要　第5号「パスカルの『賭け』について」参照

10）これは何もカントのいわゆる「物自体」(Ding an sich) を意味しない。「感覚」(sens) を通じて私たちに与えられる，具体的でありのままの世界を指す。

11）このことはベルグソンがここにいわゆる「理性」に相当する機能について，「それはただ実在的なもの (réel) を利用する (se servir de) ためにすぎない」（傍点筆者）と指摘している点を併せ考えると興味深い。（cf. H. Bergson, Introduction a la métaphysique, La pensée et le mouvement, P. U. F., 1969, p. 212）

12）この意味でハイデッガーが人間を「世界内存在」(In–der–Welt–sein) と規定し，「道具」(Zeug) 使用に見られる「世界」との「配慮」(Besorgen) 的なかかわりをその根本的な在り方とし，単なる「認識」(Erkennen) を「配慮」の「欠如」(Defizienz) として第二義的な位置においたことは，極めて注目に値する。（vgl. M. Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer Verlag Tübingen, 1972, s. 61）

13）短大紀要　第7号「パスカルの人間観II」参照

14）ここでとくに「直観」でなく「直観」の訳語をあてたのは，原語として《intuition》でなく《sentiment》が使用されているためである。そこには《intuition》よりも広い意味が指向されていると思える。（短大紀要第3号　「パスカルにおける『繊細の精神』」参照）